

色は具体的なモノです。



ホルベインの油絵具は、優美で透明感のある色みが特徴です。その発色には、光沢、こし、粘りなど、絵具自体の物性の影響も大きい。そしてそれは、絵具づくりに最も重要な「練肉」で決まります。練肉は機械を使って行われますが、場合を見計らうには熟練と経験を必要とし、納得のいくまで練肉を繰り返し、完璧な色をめざします。色は具体的なモノ、だからマニュアルどおりにはいきません。ホルベイン絵具の命は品質です。

●油絵具20号(110 ml)チューブ、40色新登場。大きいサイズでも、品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3566)9251 大阪府東淀川区上小島1-3-29 TEL.06(6722)1514



holbein

ホルベイン絵具

www.holbein-works.co.jp

holbein

坂口寛敏

鷹見明彦 文 増田智泰 写真・印

循環変化する世界につなぐドローイング



1972年、谷川岳一の倉沢の衝立岩にて。全学集会でアカデミズムを糾弾したヘルメットは、芸大山岳部の登攀でも必需品だった



1982

「ドイツでは、素描ドローイングが作家の考え方を端的にあらわす自立した表現であることを知りました」

二つの赤いしみ 2 1982 厚紙にアクリル絵具、バステル絵具、砂 71x51cm

東京芸術大学上野校の絵画棟七階 研究室の窓下には、新緑の樹海が広がっていた。白いキャンパスの画面一杯に描かれたドローイング。光が充ちた窓辺には、そのかたちのモアルやインスタレーションの素材の一部になるマケットや水草、カタツムリの殻などを収めた皿や容器が並んでいる。

ガラスのむこうの世界とも響鳴する線を描く、面立ちと長躯がどこか百済観音にも似た画家は、福岡で生まれ育った。父は、書家だったが、習字作法を好まず魚採りや昆虫採集、お絵描きに夢中なひとり息子に理解を示し、幼少のころから知人の東京美術校を出た画家のアトリエに通わせた。油絵をはじめたのは、中学生の時だった。一九六〇年代の半ば、少年は同郷の坂本繁二郎や久留米の石橋美術館の近代絵画コレクションに画家への夢を広げていった。繁二郎の絵からは、物を観ることに描くことの間係を教えられました。

大正、昭和初期の洋画を担った和



「つくる際に関わったすべての物との関係性を統合して、併存させる方法はないかと探っていたんです」 **1988**

Door No.1-201-1 木炭、アクリル絵具、アングル紙、綿布、ビニル 238×423×236cm

田三造や児島善三郎の母校 修猷館 しゅうぎくわん

高校では美術部に属し、毎夏当時芸大が行っていた夏期公開講座に上京して、アトリエで裸婦を描いた。

浪人して通ったすいどーばた予備校では、石膏デッサンを画面の下から上へ完璧に描いていく受講生にカルチャー・ショックを受けた。一年間、石膏デッサンに取り組み、無事合格。

一九六九年、学生運動まっ盛りの時期だった。「卒業制作は人物画とか、四年生までは展覧会やコンクールに出せない」といったアカデミックな制度や文部省と当局の癒着に対して、大浦食堂前で全学集会を開いて糾弾し「デモにも行きました」。

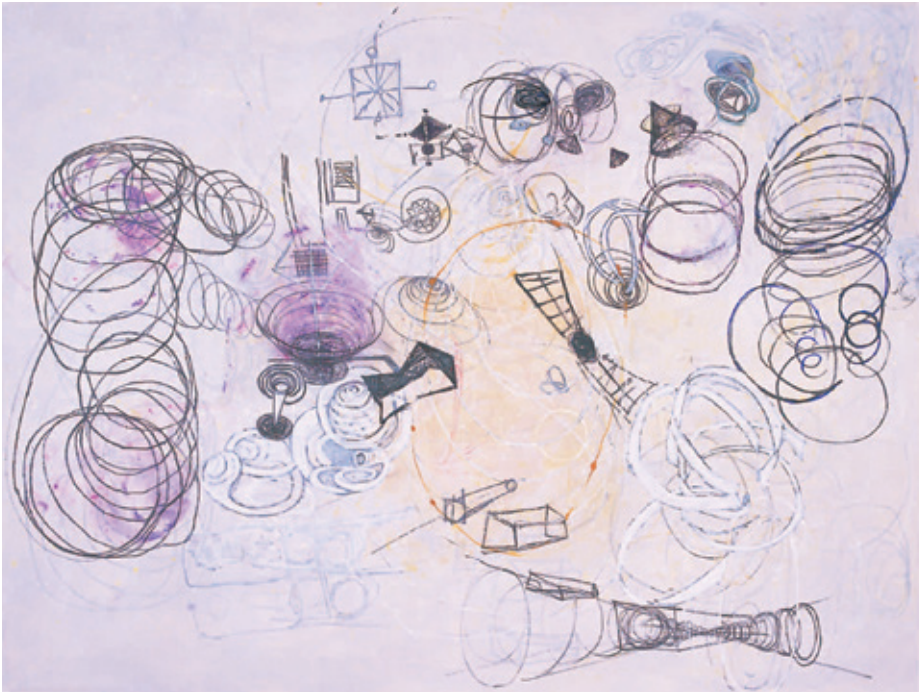
外界の再現のために奴隷と化した目と手は、私の内面にその解放を訴えた……。 (ノートより)

自己批判からスタートした「解放」への道のりは、遠く険しかった。そのころ教官となって改革を先導していた野見山暎治の教室に入り、山岳部では、北アルプスや南アルプスをよく登攀した。作品は、エルンストなどシュルレアリスム絵画の影響を



受けて、動物と人間が合体したイメージを描いていた。大学院を修了後は、七六年からミュンヘンに留学した。

「日本から離れたくて、ドイツを撰んだのは、同じ敗戦国だったのと、南国育ちとして北方の文化に惹かれたことやミュンヘンはアルプスが近



for Dragon of Giovanni Figino 1. 麻布に白亜地、油彩、アクリル絵具、チョーク、墨汁 2002 259×154cm

2002

「線は、ひねりながら描いていきます。
蔓や茎が捻えながら伸び広がっていくように。
手も身体もいっしょに
ぐるぐる回りながら」

アトリエの一隅には、カタツムリの殻、大理石粉、木片……素材やモチーフになるアイテムが整然と収納されている *



視される傾向があった。
また六〇年代から盛り返してきたドイツの現代美術では、ボイスの作品をはじめとしてドローイングが下絵でなく自立した表現として重視される傾向があった。

には、デューラーからクレイ、カンディンスキーに至る素描や版画が多く収集されていて、いつでも閲覧できた。また六〇年代から盛り返してきたドイツの現代美術では、ボイスの作品をはじめとしてドローイングが下絵でなく自立した表現として重視される傾向があった。

「二つの赤いしみ」(一九八二)は、素描の習作からさまざまな素材を用いて、より直接的な絵画表現としてのドローイングを模索したドイツでの作品。ミュンヘンでは、山登りもしたが、一年間はドイツ語を学んで日本語の世界を断ち、それからテツサンを根本から見直す作業に取り組んだ。日本では受験を含めて明治以来、明暗の調子によって形体を描くテツサンが規範となってきたが、ヨーロッパでは、三次元の存在を二次元の平面に表現する記述法として、線によるテツサンが、絵画に限らず建築や解剖学など汎い分野で行われてきた歴史がある。アルテ・ヒナコテークや国立版画素描館などには、デューラーからクレイ、カンディンスキーに至る素描や版画が多く収集されていて、いつでも閲覧できた。また六〇年代から盛り返してきたドイツの現代美術では、ボイスの作品をはじめとしてドローイングが下絵でなく自立した表現として重視される傾向があった。

さかくち・ひろとし 1949年福岡県生まれ。75年東京芸術大学大学院美術研究修士課程(油画)修了。76年ミュンヘン(西独 当時)にわたり、83年バイエルン州立ミュンヘン美術アカデミー絵画科卒業(Y・ライプカ教授のもとでマイスター・シューラー取得)。2003年より東京芸術大学美術学部(油画)教授。おもな個展として83年カム市立ギャラリー(西独)、85年ギャラリーセンターポイント、88年ヒルサイドギャラリー、89年東京ドイツ文化会館、91年調布画廊、93年村松画廊、95年ギャラリー M、02年表参道画廊、03年ギャラリーGANなど。またグループ展として、89年「白州・夏・フェスティバル'89(山梨)」、90年「洪川現代彫刻トリエンナーレ(群馬)」、91年「多摩川野外美術展(東京)」、94年「ファール立川アートプロジェクト(東京)」、96年「ハンブルグ現代日本美術展(ハンブルグ市立カンブナーゲル・K(独))」、2000年「越後妻有トリエンナーレ(新潟・長野)」、02年「つやま芸術祭(岡山)」など多数に出品。



芸大絵画棟7階アトリエの窓からは、上野の森が見わたせる。窓辺には、マケットをのせた皿や水槽が静かに光を浴びていた *

八四年、家族とともに八年間に及んだドイツ留学を終えて、福岡に帰った。二年後、母校の非常勤講師となって上京した。《Door No.1-201-1》(一九八八)は、当時使っていた芸大のアトリエの部屋番号がタイトルになっている。綿布や紙、ヒニルといった素材が、描かれたり塗られたり滲みを付けられて支持体へと変容する際が、床や壁という現実の空間との関わりに探られている。「絵が生まれ得る空間とは何か、どうやったら絵が成立するか」という場の状況と領域を思考した過程すべてを統合して示す方法はないかと」。

こうしたドゥローイングの作品とともに、山梨県白州町の野外展で制作した、廃車を山林に入れてビニル・ホースで水を循環させ苔を培養する試みをはじめとして、榛名山麓の公園、多摩川と場所を変えてつくられた野外作品は、場の特性をよく構造に織り込んで、すぐれたアースワークのつくり手としての評価を高めた。

「野外作品も、拡張されたドゥローイング概念の実践であり、『空間のなかのドゥローイング』なんです」。

《for Dragon of Giovanni Figo 1》(二〇〇二)は、白亜地にした麻布にチョープの墨汁やチョークで線描し、油彩とアクリルで着彩した大作。坂口の作品に繰り返しあらわれる渦巻きや螺旋、紡錘形といった生成と循環のエネルギーの流れに沿ったかたちが、自在なゆらぎとさわめきの場をくり展いている。「何もないと思われるところに原初的な発生がはじまる状態……。創造とは、無から有そして再び無へと循環する世界のプロセスに自分をつなげていく行為だともいえます」。

気がつくくと、白田の空にオソンの霧を浸潤させている上野の杜の茂みとドゥローイングの渦が絡みはじめている。岩壁や洞窟の肌を描きはじめた猿人の祖先から分岐するうちに、どこかでヒトは、クレヴァスに迷い込んでしまったのか……。線というザイルとともに絵の原理を訊ね行くトレッキングに果てはない。

「野外作品も、拡張されたドゥロー

たかみ・あきひ「美術評論家」